

○今回は梨木果歩さんの『西の魔女が死んだ』を紹介しします。

《あらすじ》

中学に進んでまもなく、どうしても学校へ足が向かなくなった少女まいは、季節が初夏へと移り変わるひと月あまりを、西の魔女のもとで過ごした。西の魔女ことママのママ、つまり大好きなおばあちゃんから、まいは魔女の手ほどきを受けるのだが魔女修行の肝心なめは、何でも自分で決める、ということだった。喜びも希望も、もちろん幸せも…

次の日、まいが目を覚ますと、もうおばあちゃんは庭で草木に水をやっていて。昨日と同じように雲一つないいい天気だった。まいは、パジャマのままで庭に出た。

「おばあちゃん、おはよう」

「おはよう、まい」

おばあちゃんは、水道の水を止めて、エプロンで手を拭きながら、

「まいは植物の名前をどれくらい知っているかしら？」

と、いたずらっぽく笑いながら訊いた。

まいは唇に手をあてて考えながら、

「おばあちゃんが前にいくつか教えてくれたでしょう、これが金木犀で、これがバラ。まん中の大きな木が樫の木でしょう、秋にどんぐりがいっぱい落ちる……」

「そうです。よく覚えていましたね。ではこれは何だか分かりますか？」

と言って、おばあちゃんはバラの繁みの間に勢いよく伸びている水仙のような葉っぱの群れを指した。

「水仙かなあ。違う？」

おばあちゃんにはやりとしたまま黙って首を横に振った。

「分かんないなあ、何なの、おばあちゃん」

「まいのよく知っているものです」



よ。にん・にん・く」

「え？ あの臭いにんにく？ どこになるの？」

「ほほ、にんにくは球根のように地面を掘って収穫するんです。こうして、バラの間に植えておけば、バラに虫が付きにくくなるし、香りをよくなるんです。さあ、着替えていらっしやい、朝ご飯にしましょうね。今日はお味噌汁とご飯ですよ」

「はい」

まいは、こういうことを教わるのがうれしかった。夕べおばあちゃんの言っていた不思議な話の一部のような気がして。

朝食が済むと、鶏小屋の戸が開けられて、鶏たちが外に出てくる。雄鶏が一羽と雌鶏が三羽いる。雄鶏はいかにも尊大な様子で頭を高く上げ、周囲を睥睨しながら他の雌鶏を従えて出てくる。まいたちが毎朝食べているのはこの鶏たちの卵だ。

今日も天気がいいので、雄鶏は機嫌よく日光浴をしながら、羽をバタバタとさせ、コケコッコと鳴いた。そして、足で庭土を後ろに蹴りながら、せわしなく頭を上下させてミミズや虫を探している。他の雌鶏たちもそれに倣って、思い思いにあちらこちらつついていく。雌鶏のうちの一匹がミミズなりオケラなり見つけると、すかさずやってきて横取りするのはいつもこの雄鶏だ。



まいはこの雄鶏をこっけいに思うと同時に、そういう場面に出くわすと、いつも腹が立って雌鶏たちの仕返しをしてやりたくてたまらなくなる。けれど、以前に箒の柄でつついて、逆上した雄鶏に飛びかかってこられたことがあるので、それからは用心してあまり近づかないことにしていた。

以来、まいと雄鶏はお互いに何となく意識しあって、(雄鶏がどう思っているのかは誰にもわからないのだが、雄鶏もしょっちゅうまいの方をちらちらと見るのは事実である)ぎくしゃくしている。

まいは雄鶏の視線を感じつつ鶏たちの横を通り、野いちごのあ

った林を抜けて、丘の上まで出た。そして、思いきり深呼吸した。五月の新緑の匂いが胸いっぱいに充滿した。

丘から下の方へ向かって斜めに細い道が延びていた。イタドリやギンギシ、蓬などで半分覆われているが、昔おばあちゃんに連れられて降りていったことがあった。

まいは、そのときのことを思い出して何となくその道を降りていった。あのときはどこに行ったのだったか……よく覚えてないけれど、何か不思議なものを見たような思い出がある。

五メートルほど降りていったところに、回りを木に囲まれた陽当たりのいい場所があった。そこから左に竹林、右に杉林が始まっており、道は更に杉林の奥まで続いていた。

その目の前の陽当たりのいい場所は、ほの暗く湿った竹林や杉林の間に、ぽっかりと天に向かって開いたような所で、まいの記憶にある場所とは違っていたけれど、まいは何だか妙にその場所が気に入った。

古い切り株が幾つもあり、それぞれの窪みに、花をつけたあとすみれが幾株も、弾けんばかりの莢をつけて収まっていた。このすみれが全部花をつけている様を想像して、まいはうれしくなり、そしてそれを見逃したことを残念に思った。

切り株の一つに腰をかけると、気持ちがいんと落ち着いてきて、穏やかな平和な気分が満たされる。

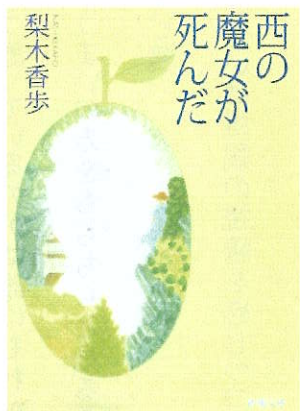
若い楠や栗の木、樺の木などが回りをぐるりと囲んでおり、まいはそこに座っていると、何かとても大事な、暖かな、ふわふわとしてかわいらしいものが、そのあたりに隠されているような気がした。小さな小鳥の胸毛を織り込んで編まれた、居心地のいい小さな小さな巣のようなもの。

「わたしはここが大好きだ」

まいはだれにもなく呟いた。



映画「西の魔女が死んだ」より



新年度が始まり約2か月あまりが過ぎました。環境の変化や季節の移り変わり等で疲れが溜まっていますか。そんなときは、本を読んでゆっくりするのはいかがでしょうか。今回紹介した『西の魔女が死んだ』には自然がたくさん出てきたり、おばあちゃんの優しさに触れたりして心が癒されます。映画にもなっているので、ぜひ観てみてください。

【心をいやす 優しい本】

